

学級活動の授業

木村 杏子

教職大学院教育実践コース 2年

中国では、お互いのよさを認め合う文化があまりなく、いじめも実際には多いと聞いていた。したがってお互いのよさに気づき、望ましい人間関係を構築するための「学級活動」が提案できればよいのではないかと考えた。よりよい人間関係を育てる手段として、グループワークトレーニング（以下GWT）を授業に取り入れることにした。GWTとは、短時間で人間関係を学び、コミュニケーションスキルを身に付ける参加型体験学習である。他者と協働を通し、責任を果たすことを通じてコミュニケーション能力を高める効果が期待できる活動である。今回「なぞの町を完成させよ（私たちのお店屋さん）」というGWTを使用した。このGWTは正確に話すこと、正確に聞き取ることが重要な活動である。情報カードをもとに、どんな店がどこに並んでいるのかを探っていくもので、いかに自分のもっている情報を正確に伝え合い、自分の役割を考え、しっかり協力できるかが鍵となる。児童にとって、仲間と協力してこのような課題解決型の活動をすることは、お互いのよさを認め合い、高め合うためにも有効ではないかと考えた。

事前に在籍校の5年生2クラスで同じ授業をした。この活動の目的は「友達の話をよく聞くこと」、「友達と協力すること」であることと、活動をする上でのルールを最初に伝え、4人グループで20分の時間制限を設けて取り組んだ。自分の持っている情報を伝え、班の友達と情報を整理したり共有したりしながら白熱して進めていた。最終的にはすべての班で完成することができた。普段あまりこういった活動に積極的に参加しない児童も、身を乗り出して参加している様子を見て、担任も「これまでになかった交流があった。」と話していた。授業後の振り返りシートには、「あんまり仲のよい班だと思わなかったが、ちゃんと協力できたし完成してうれしかった」と記述していた児童もいた。

南澳実験学校でも5年生で授業をさせてもらった。情報カードは同じグループのメンバーにも見せられないので、自分の持っている情報カードを互いに何度も読み、説明を聞き合う姿が見られた。演習が進むにつれて、ほとんどのグループが、白地図を中心に活発に

話し合いを進めていった。4人のメンバーが身を乗り出して互いに頭を近づけていった。白熱して口論になっているグループもあったが、こうやって課題に真剣に向き合う子どもたちの様子は文化の違いがあっても変わらないと感じた。そして完成させたときの喜びにあふれたキラキラした笑顔も同じであった。



すべてのグループに課題解決の達成感を味わうようにしてあげたかったので、活動の途中で課題解決のヒントとなる情報を流したかったが、言葉の壁がどうしてもあり、すべてのグループに支援をしてあげられなかったことが反省点である。活動の目的やそのやり方を事前に説明

しなければならなかったので、通訳を挟む分、活動時間が短くなってしまったこともある。完成せず達成感を味わうことができなかったグループの振り返りシートを見ると、「口論になった」とか「自分の主張が正しいと思っていたから協力できなかった」などと書いてあった。結果が違えば、もっと友達に対する思いも変わったのかもしれないと思うと残念である。でも、「完成しなかったが、メンバー全員がよく協力できていた」「友達がいてくれてよかった」など友達のよさに気付いて記述している児童もおり、協力することのよさを実感し、グループ内の相互理解が促進されたことも確かである。おそらく1回きりの活動では、よい人間関係を育てることは難しい。継続して意図的にこういった「場」を設定していくことが大事である。そして友達と触れ合うことの心地よさを感じ、その後の学校生活に広がっていったことや友達への理解が進んだことを捉え、価値づけていくことが必要である。これからも子どもの相互理解が促進できるようにその過程をゆっくりと時間をかけて見守りながら、実践を続けていきたい。そしてまた中国の先生方との実践交流がしてみたい。

